

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第160号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成22年6月21日

ズグロカモメ



2010. 3. 26 千歳市長都沼

撮影者 高橋良直 (札幌市手稲区)



も く じ

ナキハクチョウ観察記 長都沼の雁カモを守る会 佐藤ひろみ	2
第64回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」 北海道野鳥愛護会に環境省自然環境局長賞	3
苫小牧沖海鳥クルーズ 北海道大学野鳥研究会 南波 興之	3
千歳市にコクマルガラスの群れ 千歳市 島崎 康広	5
奥尻島・繁殖期の鳥類 美唄市 藤巻 裕蔵	6
絶滅危惧種シマアオジをどう守るか(7) 本当に中国で食べられているのか?(続報) 北海道立総合研究機構 環境科学研究センター 玉田 克巳	8
NPO法人エトピリカ基金を設立しました 厚岸郡浜中町 片岡 義廣	9
北海道初記録 ハシブトアジサシ(天塩町鏡沼) 天塩郡遠別町 泊 和幸	10
ズグロカモメの記録(千歳市長都沼) 広 報 部	10
ツクシガモ(小樽市銭函)とナベヅル(余市町)の飛来 広 報 部	11
平成22年度総会報告	12
探鳥会ほうこく	13
探鳥会あんない	15
鳥民だより	16

ナキハクチョウ観察記

長都沼の雁カモを守る会 佐藤 ひろみ

きわめて稀に迷鳥として飛来するナキハクチョウを観察したので報告します。ナキハクチョウはアラスカから北アメリカ西部に分布するとされ、迷鳥として日本に飛来し、1991～92年宮城県や北海道では1993年美唄など記録があります。この度、ガンや白鳥類の調査中に千歳川流域の剣淵川右岸遊水池(北緯42.9° 東経141.7°)において2010年4月5日から8日までナキハクチョウ1羽を観察しました。

私は千歳市と長沼町を境する通称・長都沼(第14号幹線排水路)でガン、カモ、白鳥類のモニタリングをここ10年ほど続けています。長都沼における詳細はこの本論ではないので省きますが毎春、長都沼では白鳥類がオオハクチョウ、コハクチョウ合わせて数千羽、ピーク時では最大8,110羽となり長都沼は真っ白な鳥で埋め尽くされるような光景になります。ところが今春はその白鳥の数が2,000羽前後で伸び止まったので不審に思い、周辺を探してみましたところ2009年から建設中の剣淵川右岸遊水池に多数の白鳥が峙をとっているのがわかりました。この遊水池は長都沼から直線距離で3kmほど、車で10分程のところであり昨年は存在しなかったもので、白鳥類はこちらへ移動して峙をとっているものと思われ、長都沼と合わせてカウント調査を行っていました。

数千羽もの白鳥をカウントするのは忍耐を要し、しかも早朝時にはまだ背眠している個体も多いのでオオハクチョウ、コハク

チョウと識別しながらのカウントは非常に困難です。長都沼周辺は、ガン類はマガンとオオヒシクイ、白鳥類はオオハクチョウとコハクチョウが多数混じて入る渡りルートの交差点のようなところです。それぞれ分けてカウントするのは困難なのですが、それでも7時くらいになると白鳥類は起きて首を伸ばした個体も多くなるので注意して見ると亜種アメリカコハクチョウなどもよく目することができます。

最初にナキハクチョウを発見したとき、双眼鏡では「あっ、アメリカコハクチョウかな?」と思い、望遠鏡でよくよく確認してみると、それはなんとナキハクチョウだったので。マガン中のカリガネを見つけるように辛抱すれば見つけることができるとは思っていました。以前にバンクーバーではナキハクチョウの群れの中に亜種アメリカコハクチョウを1羽見つけたことがあります。マ



ナキハクチョウ 剣淵川右岸遊水池 筆者撮影

イフィールドの地元でナキハクチョウを見つけることができ、なにやら家の中での探し物をようやく探し当てたような安堵感がありました。

このナキハクチョウはオオハクチョウと行動を共にしていました。コハクチョウが数羽この個体を取り囲んだとき、「ヴォーヴォー」とよく声を出して鳴いており、明らかに違うその声は低音に響いていました。エレガントにみえる白鳥の姿とその声とは何やら違和感さえ覚え

ました。

今春のカウント調査の目的として、長都沼周辺でのオオハクチョウ・コハクチョウの動態をつかむこと、標識コハクチョウを見つけること等、ありましたが思いがけず幸運にもナキハクチョウを見つけることができました。

新聞報道によると2010年3月5日に岩手県でナキハクチョウ1羽が観察されており、その個体が他の白鳥と共に北上してきたのではないかと思われました。

第64回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」 北海道野鳥愛護会に環境省自然環境局長賞

平成22年の愛鳥週間（5月10日～16日）の中心的行事として、環境省、日本鳥類保護連盟などの主催による「全国野鳥保護のつどい」が、常陸宮殿下、同妃殿下のご臨席の下、5月16日に石川県金沢市の石川県立音楽堂邦楽ホールで開催されました。約400名の出席者での記念式典において、当会の野鳥愛護活動に対して環境省自然環境局長賞が授与されました。当日は小堀焯治会長が出席し賞状を受け取りました。

当会は昭和45年（1970年）5月に設立され、今年2010年でちょうど40年になりました。40周年記念事業としては野幌ふれあい交流館での写真展以外は特別な計画はなく、今回の受賞は良き記念となりました。右写真は式典会場の看板を背にした小堀会長です。



苫小牧沖海鳥クルーズ

北海道大学野鳥研究会 南波興之

海鳥は、陸からでは基本的に観察することが困難です。様々な鳥たちとの出会いを求める我々鳥屋にとって、海鳥達はひとつの鬼門であり、フェリー航路で甲板に立ち必死になって探すか、漁港に迷行する個体を探すか、海岸に立ってスコープで遠くに行き交う海鳥を一生懸命に観察するなどの方法で観るしかありませんでした。もっとも一般的なフェリー航路は、沖の鳥が観察できる確率の高いとても楽しい鳥見である一方であくまでもフェリーであるため、高速で移動し、海鳥を見つけても出会いは一瞬。珍しい鳥を見つけても止まることもなくそのまま通過してしまいます。しかもフェリーでの鳥見はたいてい一泊以上の旅になってしまい、日程と金銭的な余裕がないとできません。そこで、海鳥を海上で探し、かつ見つけたら止まってじっくり観察する方法として、漁船やクルーザーを海鳥ウォッチング船にしつらえてしまうことが考えられます。幸いなことに北海道では、以前から室蘭、標津、羅臼においてホエールウォッチングが行われており、それに付随して海鳥を観察することが可能です。もっとも、当然のことですが鯨類が優先されてしまいますが・・・。また、2年前から冬期限定

ですが、根室の歯舞漁港で北方領土観察船に乗って、海鳥を観察することが可能になりました。そして、今年の5月から同じく根室の落石漁港で海鳥観察クルーズが始まりました。さらに、定期便ではありませんが、今年度、十勝で月1回漁船をチャーターした海鳥・海獣調査が行われています。このように、北海道において海鳥観察の機運が非常に高まって来ています。

本稿では、去年から著者らのグループが始めた苫小牧沖海鳥クルーズについて今まで半期分の結果を簡単にまとめ報告します。苫小牧沖海鳥クルージングは、勇払マリナーからクルーズ船をチャーターし、2009年10月から2010年5月まで計7回海鳥ウォッチングを行っています。もともと上記の船と同じく、イルカ・クジラウォッチングの船として2009年から営業を開始したことをインターネットの記事で知り、クジラウォッチングのついでに鳥を見るというスタンスで始めました。船は12人乗りのクルーザーで最大速度は22ノット（約40km/h）くらいまで出せます。料金も他の観察船と比べるとお手頃な設定となっており、人数やチャーター時間などに応じて柔軟に対応してくれています。



ミツユビカモメを襲うトウゾクカモメ

普段は、4時間のチャーターで、鵜川沿岸まで行き、そして沖に回って帰るといったコースをとっています。

秋期は、10月に3回、11月に1回行いました。10月の上旬にはミズナギドリ系とトウゾクカモメ類がメインでした。北海道の陸からは見ることができなかったオオミズナギドリがたくさん見られ、ミズナギドリの鳥山（海上の鳥の群れ）を捜し、ハイイロミズナギドリやアカアシミズナギドリの観察が出来ました。そして、その周辺はトウゾクカモメ類が囲んでおり、トウゾクカモメ、クロトウゾクカモメの様々な羽衣を見ることが出来ました。10月末にはミズナギドリ類は姿を消し、代わりにミツユビカモメの群がトウゾクカモメたちに囲まれており、ミツユビカモメ達に対して何度も盗賊行為を繰り返し、実際根負けしてエサをはき出すミツユビの姿を観察することができました。ヒレアシシギも2種見ることができ、ハイイロヒレアシシギの100羽を超える群も観察することができました。

苫小牧沖は約30km沖まで行くと水深が100mを越えるこの海域では、沖合性の鳥が観察可能となります。この付近は、海中の地形が棚となっており、潮目が発生して餌資源が多く鳥が観察しやすいポイントになっており、アホウドリ類やフルマカモメが観察可能です。10月末には、アホウドリが1羽観察できました。足環のない尖閣諸島生れと思われる亜成鳥の個体でした。この個体の観察記録は、苫小牧民報（2009.11.3）と北海道新聞苫小牧地方版（2009.11.7）に写真とともに掲載されました。

冬期には、2月と3月に一回ずつ行いました。沿岸部では、海ガモ類、沖ではウミスズメ類の観察となりました。ウミガモでは、クロガモ、ビロードキンクロ、コオリガモが非常に多く観察されます。しかし、遠い地点から飛んで逃げてしまうので、接近は困難です。しかしながら、普段陸からではこれらの海ガモ類の飛び立ちを見る機会が少ないので、いい観察機会となっています。ウミスズメ類はいわゆるただウミスズメの他にコムミスズメが多く観察されましたが、警戒心が強く主に飛翔の観察にとどまりました。冬期クルーズの愛嬌のいい海鳥はハシブトウミガラスでペアと思わ

れる個体を何度も近くでじっくり観察する機会に恵まれました。ウミスズメ類で他にケイマフリ、ウミバト、ウトウ、ウミガラス、ウミオウムが観察されました。

春季は、5月に2回行う予定です。速報ですが、この記事を書いている現在（5月10日）、5月9日に1回目を行いました。結果は、大当たり。アビ類の夏羽多数、ウミスズメ多数、夏羽のマダラウミスズメ、ハシボソミズナギドリ多数、アカエリヒレアシシギ数千羽の中に多数のハイイロヒレアシシギ夏羽と非常に大きな成果を上げることができました。特に水深100mになるあたりにできた潮目に沿うようにいた数千羽のヒレアシシギ類は圧巻でした。

以上のように苫小牧沖海鳥クルーズは普段なかなか見ることができない海鳥を割と手軽に見ることが出来ます。継続して観察することで、苫小牧の海が海鳥にとって重要なエサ場であり、渡りの中継地点であることがわかってくると思います。また、年間を通したデータをとったところにまたの機会に報告をしたいと考えています。今後は、ラインセンサスを行い定量的に海鳥の調査をする必要があると思いますが、自分では手が回らないので、誰かやっていただけたらうれしいです。

苫小牧クルーズのよい所は、札幌圏に近い場所でリーズナブルな価格で鳥の観察をでき、道東のクルーズと比べて個体数では劣ってしまうかもしれませんが、出現する鳥の種類は道東と遜色ありません。これから夏にかけて、北海道ではイルカの季節を迎えます。イルカの季節には、勇払マリーナからイルカウォッチングの乗り合い船が出るので、興味のある方はまずはそれに乗ってみることをオススメします。そして、グループが組めるのであれば、チャーターを是非オススメします。

本稿を書くにあたり、現在までに苫小牧クルーズ船に参加していただいたみなさんに感謝します。そして、毎回のクルージングで我々のわがままに最大限対応して戴いている勇払マリーナのスタッフの方々にも感謝します。

最後に今まで観察した鳥種を挙げます。

記録種：アビ、オオハム、シロエリオオハム、ハシジロアビ、ハジロカイツブリ、ミミカイツブリ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、アホウドリ、コアホウドリ、クロアシアホウドリ、フルマカモメ、オオミズナギドリ、アカアシミズナギドリ、ハイイロミズナギドリ、ハシボソミズナギドリ、ウミウ、ヒメウ、ダイサギ、ハクチョウsp.、コガモ、キンクロハジロ、スズガモ、シノリガモ、クロガモ、ビロードキンクロ、シノリガモ、コオリガモ、ホオジロガモ、トビ、オオタカ、ハイイロヒレアシシギ、アカエリヒレアシシギ、トウゾクカモメ、クロトウゾクカモメ、ユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ワシカモメ、シロカモメ、ウミネコ、ミツユビカモメ、ウミガラス、ハシブトウミガラス、ウミバト、ケイマフリ、マダラウミスズメ、ウミスズメ、コムミスズメ、ウミオウム、ウトウ、ツノメドリ or エトビリカ、キジバト、イワツバメ、ハクセキレイ、メジロ海獣：ミンククジラ、イシイルカ、ネズミイルカ、キタオットセイ

千歳市にコクマルガラスの群れ

千歳市 島崎康広

2010年になって千歳市内は珍鳥・迷鳥ブームのようです。その先陣を切ったのはコクマルガラスの群れではないでしょうか？

2月末に千歳市在住のアマチュアカメラマンの方から「新聞社にコクマルガラスを捜して欲しいと頼まれているが情報はないだろうか？」と尋ねられました。情報はありませんでしたが、現れるとしたら……と心当たりの場所をいくつかお教えした中の一つにコクマルガラスの群れがいたようです。その場所は、地名としては千歳市北信濃と千歳市都という千歳川に近い畑作地帯です。酪農家が近いこともあり、畑の中にたい肥が置かれ、それを目当てに野鳥が集まることが以前から多かったのですが、季節になるとミヤマガラスの群れも見られていました。

コクマルガラスも私が知る限りでは、2008年11月にこの周辺で千歳サケのふるさと館の学芸員の方が確認されています。ハシブトガラスとハシボソガラスの群れの中に淡色系が数羽との話をご本人からおうかがいしたのですが、肉眼での確認とのことで、もしかしたらこのハシブトガラスとハシボソガラスの群れの中に暗色系のコクマルガラスがいたのかも知れません。

今年に入ってからコクマルガラスの情報は、地元紙の千歳民報(2010.4.27)にも書かれていますが、1月末頃から「白いカラスがいる」と付近の住民の間では話題になっていたそうです。最初に写真に撮られて確認されたのは、3月4日だと思いますが、それからほぼ毎日、3月19日まで確認されました。その間、24～27羽の群れの中に暗色系が約20羽、淡色系が5羽前後で、ミヤマガラスが数羽混じることもありました。

最初は市道脇のたい肥で餌を探したり、市道脇まで出てきて餌を探していた、近くの林などをねぐらとして朝から夕方までたい肥周辺で餌を探すという行為を繰り返していたと思われます。しかし、コクマルガラスの存在が多くの方に知られることとなって道路脇にクルマを停めるカメラマンやバードウォッチャーが多くなってきたことが影響したのか、近くの林や市道から奥に入ったたい肥が置かれている場所で見られることが多くなってきました。

春の渡りの時期は過ぎましたが、例年、この周辺から長都沼までの畑作地帯では、渡りの時期になるとミヤマガラスの群れが見られますし、少なくとも2008年の秋から数えて4回の春秋の渡りの時期に2回はコクマルガラスが確認され、もしかすると情報がない季節にも来ていたのかも知れませんし、この秋にも餌の場所を覚えて同じ群れがやってくるのかもしれない。しかし、それには迎える側の人間の意識も大切なのかもしれません。

この原稿を書いている少し前、と言うよりコクマルガラスの話題で賑わっているのと時を同じくして、鉄道の写真を撮ることを趣味にしておられるいわゆる「撮鉄」のマナーが問題になっていました。コクマルガラスも最終的にはパトカーが出ることになってしまい、それとほぼ同時にコクマルガラスの目撃情報もなくなってしまいました。たまたま時期が同じで、「コクマルガラスが嫌気を差してなくなった」というのは飛躍しすぎでしょうが、私たち「撮鳥」や「観鳥」のマナーも自分自身も含めて考えなければいけないのかもしれない。

今年に入ってからには特に長都沼やその周辺では、この号で紹介されているズグロカモメを初めとして、珍鳥や迷鳥の話題に事欠かなくなってきましたが、野鳥へのプレッシャーだけではなく、そこを生活の場としている方々への配慮を欠くと珍鳥どころか、今まで当たり前のように毎年、渡ってきた野鳥への環境を保全することさえ難しくなっていくのではないのでしょうか。



電柱・電線にとまったコクマルガラスの群れ
2010.3.4 若松久仁男さん(千歳市)撮影

奥尻島・繁殖期の鳥類

美唄市 藤 卷 裕 蔵

奥尻島は北海道の日本海側にあり、日本海沿いの渡りルート上にあると考えられる。しかし、利尻・礼文両島、天売島の鳥類についてはこれまでかなり報告が発表されていて、日本では繁殖しないカラフトムシクイなどが通過していたり、迷鳥がよく記録されることなどが知られているのに、奥尻島の鳥類に関する報告は少ない。2008年7月に観光で奥尻島を初めて訪れ、2009年5月上旬には北海道バンダー連絡会の共同調査で鳥類の標識を行い（北海道新聞野生生物基金の助成を受けた）、繁殖期の鳥類について調べることができた。このときの観察記録をもとに「利尻研究」誌に「繁殖期における奥尻島の鳥類相」を発表したが、この論文が会員の皆さんの目にふれる機会は少ないとおもうので、この場をお借りしてその概要を紹介したい。奥尻島は面積142.74km²で、北海道の離島のなかでは利尻島に次ぐ大きな島である。島の大部分は森林で、南部に農耕地があり、中央部の一部が放牧地になっているくらいで、住宅地の面積も小さい。奥尻島の鳥類については、私の知る限りでは小山・小山（1981）、三浦（1988）、鈴木ほか（1990）の報告がある。このうち、鈴木ほかの報告は森林だけの調査結果である。私の調査結果は、2008年7月中旬に西海岸沿いの森林と高茎草地、2009年5月上旬に南部の農耕地と森林で得られたもので、島全域で調査したわけではなく、また時期も繁殖期全体にわたるわけではないが、これまでの報告もあわせると、繁殖期の鳥類相をほぼ把握できているとおもう。ただし、5月上旬にはすでに夏鳥が観察されたのと同時に冬鳥のカモメ類、渡り途中のクサシギ、タヒバリ、キレンジャク、ツグミ、シロハラ、カシラダカ、アトリなども記録された。以上の調査結果に基づいてまとめた鳥類リストを表1にあげた。

表1にあげた鳥類は全部で90種である。このうち海鳥はウミウなど7種、水鳥・水辺の鳥はサギ類やカモ類など



奥尻島位置図

12種で、多くは陸鳥であった（ミサゴ、オオジシギ、セキレイ類、カワガラスを含む）。全体に種構成に北海道本島との違いは見られなかったが、次のような特徴をあげることができる。

日本の離島で繁殖する陸鳥の種数は、島の面積が大きくなるほど多くなることが知られている。鈴木ほか（1980）の調査結果では、奥尻島で繁殖すると考えられる陸鳥53種（ドバトを除く）という種数は、面積当りの繁殖種数という点で比べると他の島より多いということである。このほか、今回の調査でクロツグミ、アカハラ、シメ、コムクドリなどの森林の鳥が新たに記録されたので、この結論は変わらない。

もうひとつ、奥尻島のキツツキ類の種構成に特徴がある。日本列島とその近隣の島では繁殖するキツツキ類の種数は大きな島ほど多く、生態の類似するオオアカゲラとアカゲラは小さな島では共存できないとされている（樋口・小池1978、Higuchi 1980）。今回奥尻島ではアカゲラ、オオアカゲラ、コゲラの3種が観察された。これまでも三浦（1988）は6月中旬にアカゲラとコゲラを、鈴木ほか（1990）は7月上旬にオオアカゲラとコゲラを観察しており、これらが繁殖期に継続して島に生息していることは明らかで、繁殖しているのはほぼ確実だとおもう。鈴木ほか（1990）も「四本土を除く日本周辺の島で、3種以上のキツツキ類の繁殖が確認されているのは国後島だけであるので、これに次ぐ記録となる」と述べており、奥尻島は国後島や利尻島より小さい島ながら近縁のキツツキ2種が共存できる環境をそなえているのである。

このほか、環境省（庁）の標識事業の記録によると、カラフトムシクイ、ムジセッカ、カラフトムジセッカなど大陸やサハリンで繁殖する種が渡り時期に北海道の日本海側を通過しているので、これらの鳥との出会いを楽しみにしていたのだが、今回は観察できなかった。調査を続ければこれらを記録できる可能性はあるが、もしかしたら奥尻島はこれらの種の渡りルートからはずれているのかもしれない。この点を明らかにするのは今後の課題の一つである。

文 献

藤卷裕蔵. 2010. 繁殖期における奥尻島の鳥類相. 利尻研究 (29):1-6.

Higuchi, H. 1980. Colonization and coexistence of woodpeckers in the Japanese Islands.

Journal of Yamashina Institute for Ornithology 12: 139-156.

樋口広芳・小池重人, 1978. 日本列島およびその周辺諸

鳥におけるキツキ類の生息状況. 鳥 27:24-36.
 小山政弘・小山弘昭, 1981. 奥尻島探鳥記. 北海道野鳥
 だより (45):7-9.
 三浦二郎, 1988. 道立自然公園総合調査(檜山道立自然
 公園) 報告書, 第2章鳥類. 道立自然公園総合調査(檜

山道立自然公園) 報告書, 176-202.
 鈴木祥悟・由井正敏・伊達功・高橋和規, 1990. 奥尻島
 の鳥類-繁殖期の森林性鳥類群集-. 北方林業 42:197-
 201.

表1. 繁殖期における奥尻島の鳥類.

種名	小山・小山 1981	三浦 1988	鈴木ほか 1990	藤巻 2010	種名	小山・小山 1981	三浦 1988	鈴木ほか 1990	藤巻 2010
ウミウ	○			◎	キレンジャク				△
ゴイサギ				△	イソヒヨドリ	○			◎
ダイサギ				◎	カワガラス			○	
チュウサギ	○				ミンサザイ				◎
コサギ				△	コマドリ				△
アオサギ				△	ノゴマ		B		
オシドリ	○			△	コルリ			○	△
マガモ	○			◎	ルリビタキ				△
カルガモ				◎	ノビタキ				◎
シロガモ	○			△	トラツグミ			○	◎
ハチクマ		○			クロツグミ		○		◎
ミサゴ				△	アカハラ	○	○		△
ノスリ				△	シロハラ		B		△
ハヤブサ	○			△	ツグミ	○	○		◎
チゴハヤブサ				△	ヤブサメ	○	○	○	◎
キジ				◎	ウグイス	○	○	○	◎
コチドリ	○			△	エゾムシクイ			○	◎
クサシギ				△	センダイムシクイ	○	○	○	△
キアシシギ	○			△	キビタキ		○	○	◎
タシギ				△	オオルリ	○	○	○	◎
オオジシギ		○		△	エナガ		○	○	
セグロカモメ	○			△	ハシブトガラ			○	◎
オオセグロカモメ	○			◎	コガラ	○			
ワシカモメ	○				ヒガラ	○	○	○	◎
シロカモメ	○				ヤマガラ		○	○	◎
ウミネコ	○			◎	シジュウカラ	○	○	○	◎
キジバト	○	○	○	◎	ゴジュウカラ	○		○	◎
アオバト		○	○		メジロ			○	△
ジュウイチ		○			ホオジロ	○	○	○	◎
ツツドリ		○	○		ホオアカ		○		◎
アマツバメ		○		△	カシラダカ	○	B		◎
アカショウビン		○			アオジ	○	○	○	◎
ヤツガシラ				△	クロジ		○	○	◎
アカゲラ		○		◎	アトリ				△
オオアカゲラ		○	○	△	カワラヒワ	○	○	○	◎
コゲラ		○	○	◎	マヒワ				◎
ヒバリ	○	○		△	イスカ				△
ツバメ	○			△	ベニマシコ	○	○		
イワツバメ	○				イカル		○	○	◎
キセキレイ	○	○	○	◎	シメ				◎
ハクセキレイ	○	○		◎	スズメ	○	○		◎
ビンズイ	○	○	○	△	コムクドリ	○			◎
タヒバリ				△	ムクドリ	○			
ヒヨドリ	○	○	○	◎	ハシボソガラス	○	○		◎
モズ			○	◎	ハシブトガラス	○	○	○	◎

注)◎=ラインセンサスで記録された種, △=標識調査のさいに捕獲・観察された追加の種, B=標識調査で記録された追加の種

絶滅危惧種シマアオジをどう守るか (7)

本当に中国で食べられているのか? (続報)

北海道立総合研究機構 環境科学研究センター 玉田 克巳

この連載の4回目(157号、平成21年9月)で、シマアオジが中国で食べられているということが記述されている2つの文献を紹介した。先ごろ、中国で食べられているということについて記述されている新しい文献(記述そのものはとても古いものを中心である)を見つけた。今回はこのことについて書かれた3つの文献を紹介したい。

まず発端となったのは、Carey et al (2001): The Avifauna of Hong Kongという英語の本である。漢字では「香港鳥類名録」という表題がついているが、内容は香港の鳥類についての生息状況をまとめたものである(図鑑ではなく、鳥の絵はない)。この本によると、香港でもシマアオジが減っていると記述されており、Kershaw (1904)とVaughan and Jones (1913)を引用して、珠江デルタ(Pearl River delta)で多くのシマアオジが網で捕獲され、Rice-Bird(直訳すればお米の鳥)として食用目的で販売されていると紹介している。珠江デルタとは珠江という川の河口にできた三角州のことで、香港、マカオ、広州を結ぶ三角地帯をさす。まさにこの連載の4回目で紹介した高(1996)のシマアオジを食べるお祭りが行われている三水市があったり、Chan (2004)がシマアオジの密猟を紹介している地域のことである。Rice-Birdという言葉はChan (2004)の中でたびたび登場しており、イネを食害する害鳥というところからつけられた名前である。

Kershaw (1904)はIBISという科学雑誌に記述された文献で、中国広東海岸の鳥類リストである。IBISはイギリスの鳥学会誌であり、現在でも刊行されている鳥類学の権威ある科学雑誌である。1901年10月から1903年6月までの1年半の間に香港とマカオ(主としてマカオ)で集められた情報である。「Styan氏の協力を得た」と記述されているが、Styan氏も、この文献の著者のKershaw氏も何者であるのかはよくわからない。私の推測であるが、ヨーロッパかどこか(たぶんイギリス)の出身であるKershaw氏が、この地域に滞在している間、地元で詳しいStyan氏の協力を得て集めた情報なのだろう。文中にはcollectという言葉が出てきて、カモの仲間を銃によって捕獲したものがあることが記述されている。collectは集めるという意味であり、この当時の博物学を考えれば標本(死体)を集めた可能性はあるが、単に観察情報である可能性もある。詳しい記述はない。陸域の情報収集に主眼がおかれたことが書かれている。シマアオジについては3行の記述があるだけである。「秋に旅鳥として訪れるが海岸部では多くない。広東では9月と10月におびた^{しゅごう}だしい数の個体が網で捕獲され、Rice-Bird

として知られている。」と書かれている。ほかのEmberiza属の鳥としてはホオアカとアオジの記述があるが、ホオアカは「かなり普通の留鳥」、アオジは「普通の冬鳥」と短い記述があるだけで、混獲などの記述はない。このことを考えれば、ほかの種が混獲されている可能性はあるものの、食用にするRice-Birdの捕獲は、シマアオジを目的に行われていることが伺われる。

Vaughan and Jones (1913)もIBISに掲載されたものであり、香港やマカオ、西江(この地域を流れる川で、中国で3番目に長い)周辺の鳥類について紹介したものである。シマアオジについては、冒頭からRice-Birdと書かれており、春と秋に渡ってくる旅鳥で、冬にはいないと書かれている。捕獲に関する記述部分を直訳すると以下のとおりである。

「この小さい鳥はご馳走として尊ばれ、おびた^{しゅごう}だしい数の個体が、プロの鳥捕獲業のものに捕獲されている。捕獲方法はイギリスで使われているような、罠(call-birds)を使った無双網(Clap-nets: たぶん両無双)で行われている。広大な数の個体が捕獲され、竹籠(bamboo-cage)に詰め込まれ、最終的には川に入れて溺れさせる。Rice-Birdは、広東の地元富裕層のみならず、中国人同様にヨーロッパ人からも(ご馳走として)尊ばれ、おびた^{しゅごう}だしい量が消費されている。多くは缶詰にされてシンガポールやアメリカに輸出されている。実際には中国では(シマアオジだけでなく)、あらゆる黄色っぽい小さい鳥が、Rice-Birdとして売られ、マカオを巡回していたある商人は200羽のキセキレイ(原文では*Motacilla melanope*と書かれているが、これはキセキレイ*M. cinerea*のシノニム)を料理用として(店に)陳列していた」とある。

さて、中国で食べられているということを、以前に紹介した文献も織り交ぜて少し整理してみよう。高(1996)には、1992年10月から広東省三水市で、シマアオジを空飛ぶ朝鮮人参と称して食べるお祭りが開かれたことを紹介し、10万人が集まってシマアオジを食べているということが記述されている。Chan (2004)も同じお祭りのことを紹介している。こちらの文献では、観光客1万人という記述で、数字が一致しないが、おびた^{しゅごう}だしい数のシマアオジが食べられていることは一致している。Chan (2004)では、この祭りは1997年に終わり、2000年8月に中国でシマアオジが国の保護鳥になったことが紹介されているが、同時に密猟が横行しており、摘発事例だけでも数千羽から数万羽が押収されている。また高(1996)では、2100年以上前の王の陵墓から、副葬品としてシマアオジの骨が出土してお

り、紀元前からシマアオジを食べる習慣があることが記述されている。今回紹介した文献は、シマアオジが捕獲されている年代についての正確な記述はないが、文献自体の印刷された時期が1904年と1913年であるので、記述の内容は19世紀の後半から20世紀初頭のことでありと思われる。捕獲数についても正確な記述はないものの、おびただしい数ということである。文献としては100年も前の古いものであるが、古くからシマアオジを食べる習慣があることがわかった。さらにわかってきたことは、罟と無双網を使っていること。シマアオジ以外の鳥も犠牲になっていること。溺死させていることや缶詰にして輸出していたことなどが明らかになったと思う。今回紹介した3つの文献は、高(1996)やChan(2004)、あるいはBirdlife Internationalなどのホームページでは引用されていないので、古い記述ではあるが、シマアオジの減少を考える上では、貴重な情報であると思う。

文献の収集には、酪農学園大学の吉田剛司准教授と石下

亜衣紗さんに協力していただいた。記してお礼申し上げる。

文 献

Carey GJ, Chalmers ML, Diskin DA, Kennerley PR, Leader PJ, Leven MR, Lewthwaite RW, Melville DS, Turnbull M and Young L (2001) The Avifauna of Hong Kong. Hong Kong Bird Watching Society.

Chan S (2004) Yellow-breasted Bunting *Emberiza aureola*. BirdingASIA 1: 16.17.

高育仁 (1996) 天上人參禾花雀. 大自然 1:34-35.

Kershaw JC (1904) List of the Birds of the Quangtung Coast, China. Ibis 46:235-248.

Vaughan RE and Jones KH (1913) The Birds of Hong Kong, Macao, and the West River or Si Kiang in South-eastern China, with special reference to their Nidification and Seasonal Movements. Part II. Ibis 55:163-201.

NPO法人エトピリカ基金を設立しました

厚岸郡浜中町 片岡 義 廣

北海道では様々な海鳥が繁殖し越冬通過していきます。そんな海鳥が激減している現状をご存知でしょうか。人の目につくことが多い陸鳥と違い、離島などで人知れず繁殖する海鳥は関心をもちられることも少ないようです。道東の霧多布において25年間エトピリカを中心に海鳥を見つけてきましたが、そこで目にしたのは信じられぬぐらいの減少ぶりでした。エトピリカについては海上デコイなど保護策をいろいろ考えてきましたが、なんとか毎年数羽が飛来しつづけているのが現状です。同じく絶滅が心配されている海鳥にケイマフリがいます。天売島や知床半島など比較的大きな繁殖地でも激減しているといえます。霧多布では元々小さな繁殖地しかありませんでしたが、それでも海を見れば普通に見られる鳥でした。エトピリカの飛来で知られる小島では、ケイマフリも5羽にまで減少し12年間も繁殖が見られなくなっていました。しかし、こちらは保護策が効いたのか、去年は最大18羽までカウントでき3つがいが繁殖するようになりました。道東の沿岸にはやはり激減しているチシマウガラスや、生息状況

がよく分かっていないウミスズメやマダラウミスズメなども生息しています。こうした現状から、霧多布のエトピリカから他の海鳥や地域を広げ考えていく必要があると思



海上に置くエトピリカのデコイ

い、この度NPO法人エトピリカ基金を仲間と立ち上げました。海鳥の現状を調査し、問題点を把握し、保護に結び付けていくことを目的としています。こうした活動を続けていくには多くの方々の応援が必要です。サポート会員などを募集していますが、まずは私たちの活動を知っていただきたいと思っています。ネットをご利用できる方はぜひホームページをご覧ください。ネットを見られない方は簡単なパンフレットを送付いたしますのでご請求いただければと願っています。

特定非営利活動法人 エトピリカ基金

088-1522 北海道厚岸郡浜中町湯沸157番地

Tel : 0153-62-2202

E-mail : etopirika@mpd.biglobe.ne.jp

HP : http://www.geocities.jp/etopirika_fund/

北海道初記録 ハシブトアジサシ (天塩町鏡沼)

天塩郡遠別町 泊 和 幸

昨年(2009年)の6月21日、知人から珍しい鳥がいると連絡が入りました。そのまま農作業を続けていたら、また別の知り合ったばかりの知人からも電話でアジサシみたいだと連絡がありました。

23日午後から天塩の鏡沼に行くと、遠くで翼の長い鳥が水面に嘴をつけて飛行していました。アジサシは急降下してダイビングするものだとばかり思っていたのですが、様子が違います。一度飛び去り、1時間ほどして近くまで飛んで来たので双眼鏡でのぞくと、嘴が太くて左の翼の表側付け根あたりが怪我をしているようでしたので、急降下はしますが、水面から体を残して頭だけを入れて2匹ほど小魚を食べていました。1羽でしたが飛び去ったので辛抱強く待つと1時間ペースで来るのが分かり、ミサゴのようなダイビングはせずに、終始水面に嘴をつけながら飛行し小魚を食べる姿はなかなか器用な鳥です。撮影が終わり少し落ち着くと、知人も側に来てアジサシだろうと確認に来ましたので、ハシブトアジサシだよ、なかなか見られない鳥だと説明すると慌ててカメラを取りに行きましたよ。怪我を癒すために立ち寄ったのだろうか27日にはもうその姿はありませんでした。

最近、札幌にいる北海道野鳥愛護会の知人にその話をして調べてもらうと、道内では初記録で日本全体でもかなり珍しいとのことでした。予想外でしたのでご一報させてい



2009年6月23日 天塩町鏡沼

たきました。

[広報部注] ハシブトアジサシは南の鳥で、日本にはまれな旅鳥として飛来し、南西諸島、九州、四国、本州太平洋側で記録があります。これまでにおそらく数十例の記録があるのではと思われますが、公表されているものの最北記録は宮城県です。北海道で記録されたのはもちろん初めてで、何らかの理由による迷行と考えられます。天塩町に飛来した写真の個体は夏羽で、アジサシ夏羽に似ていますが、ハシブトの名の通り、嘴が太くて黒いこと、また尾が短めで、切れ込みが浅いことなどから、アジサシとは明確に区別されます。

ズグロカモメの記録 (千歳市長都沼)

広報部

2010年3月下旬から4月上旬にかけて、北海道では希なズグロカモメが千歳市の第14号幹線排水路(通称・長都沼)に飛来しました。飛翔中の写真(この号の表紙写真)と、とまっている写真を載せて紹介します。

愛護会会員等による観察、および新聞報道(千歳民報2010.3.24、北海道新聞2010.4.1)を総合すると、長都沼で確認されたのは3月23日~27日、4月2日~4日です。途中に5日間の空白がありますが、その間の個体の交代はなく、飛来したのは1個体だけとみなされます。

飛来個体は成長夏羽でした。ユリカモメ成鳥夏羽と似ていますが、嘴が黒くて短いこと、頭部の黒が後頸部近くまで達していること、初列風切下面の黒斑紋が目立つこと、とまっている時には翼先端の白と黒の斑が明瞭なことなどが識別根拠としてあげられます。

北海道でのこれまでの記録として広報部が把握している

のは、豊頃湧洞沼(1976.10.28)、浜頓別(1979.10.7)、根室西別川河口(1998.5.20)、鶴川河口(1998.5.10.16)、石狩市八幡(2003.5.20)の5例で、今回が6例目となります。



2010.4.4 千歳市長都沼 坂井伍一さん撮影

ツクシガモ(小樽市銭函)とナベヅル(余市町)の飛来

広報部

昨年(2009)の11月から12月にかけて、北海道では希なツクシガモとナベヅルがそれぞれ1羽ずつ小樽市銭函町と余市町黒川町に飛来し、比較的長期間滞在したので過去の記録と合わせて紹介します。

ツクシガモ

観察された場所は小樽市銭函町海岸の東端、砂浜が石狩湾新港西埠頭に達する付近です。成鳥(雌雄不明)でした。愛護会会員等の観察では、浜に造られた排土捨て場にてきた干潟状の水溜りで水藻のようなものを食べていたり、外海に飛んでいったりを繰り返していたようですが、2009年11月24日から12月11日まで18日間の滞在が確認されています。ツクシガモは「筑紫鴨」の名の通り、冬季に主に九州北部に多く渡来しますが、北海道では極めて希なカモです。何らかの理由により迷行し、そのまましばらく居つたようです。

北海道でのツクシガモの記録はこれまで散発的に根室市春国岱(1977)、釧路管内浜中町(1982)、石狩市石狩川河口(1986)、石狩市茨戸川(1991)など10例ほどあります。最近の記録は2002年10月6日の渡島管内長万部町の浜でのもの(新城、北海道野鳥だより130、2002)と思われます。なお、茨戸川の個体の滞在は1~2月だったので、越冬とみなされていました。今回の個体も、もしかしたら近くの不凍域で越冬するのではとされていました、厳冬期を前にどこかに移動してしまったようです。



ツクシガモ 2009.11.29 田中 陽さん撮影

ナベヅル

観察された場所は後志支庁余市町黒川町の田んぼとその周辺一帯です。新聞報道(北海道新聞後志地方版2009/11/19)などによると、飛来したのは幼鳥で2009年11月11日のことでした。その後12月6日までの26日間、田んぼで

落ち穂を食べていたり、周辺を飛び回ったりしたりしていたことが、地元の人や愛護会会員によって滞在が確認されています。

ナベヅルの飛来は、地元の観察者によると余市町では1996年4月以来13年振りの記録ということですが、実は1996年4月には道南、道央などに多数飛来したことが新聞記事として残されています(北海道新聞1996/5/2)。



ナベヅル 2009.11.24 中正憲佑さん撮影

その記事および野鳥関係出版物などによりますと、渡島管内知内町での34羽をはじめとし、檜山管内大成町で1羽、後志管内余市町で3羽(今回と同じ黒川町)、苫小牧市柏原で1羽、石狩市美登位で3羽、網走管内濤沸湖で5羽というのがあり、延べ50羽近くが飛来しました。このような大量飛来から、単に例えば西風に押されての迷行ではなくて、繁殖地である中国東北部と越冬地である鹿児島県出水水平野を結ぶ新たな渡りのルート(北海道・サハリンルート)ができるのではという推測もなされました。でも、同年11月から翌1997年に十勝管内浦幌町や根室管内別海町で少数が観察されたものの、以後は散発的になりました。

2009年は少々多く、4月に檜山支庁今金町、せたな町、後志支庁蘭越町、留萌支庁羽幌町(天売島)、7月に根室支庁中標津町、そして11月に今回の余市町に飛来していますが、個体数はどこもそれぞれ1羽だけです。今のところ新ルートというレベルには達していないようです。

ツクシガモやナベヅルのような迷鳥の飛来は北海道の鳥社会に一時(ひととき)の彩りを添えます。また、もしかしたら将来的に彼らが北海道の鳥に本格的に仲間入りするかもしれません。地球温暖化が云々される今日、「珍客」から「見慣れた客」になる可能性は決して否定できないのではないのでしょうか。

平成22年度 総会 報告

日時：平成22年4月9日(金) 午後6時30分～8時00分

場所：かでの2・7 320会議室

小堀煌治会長の挨拶のあと、議長に戸津高保氏を選出し、議案審議が行われ、原案どおり可決、承認された。

〈議事〉

1. 平成21年度事業報告

[総務]

(1) 野鳥写真展の開催

開催期間：平成21年4月28日(火)～5月10日(日)

開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー

出展：16名、30点

(2) 「野鳥だより」の発送(156号～159号)

(3) 野幌森林公園自然ふれあい交流館写真展

開催期間：平成21年9月1日(火)～9月30日(水)

出展：7名、28点

(4) 新年野鳥講演会、野鳥写真映写会の開催

日時：平成22年1月9日(土)、13:30～16:30

場所：札幌市男女共同参画センター 4階大研修室

講師：牛山克己氏(宮島沼水鳥・湿地センター)

演題：ごはんを食べてマガンを守る!?

参加者：89名(野鳥写真提供者5名)

(5) 北海道野鳥愛護会名入りカレンダーの作成・販売(80部)

(6) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)

(7) 傷害保険の更新

[広報]

(1) 「北海道野鳥だより」156号～159号の発行

(2) ホームページの維持・運営

[探鳥]

(1) 探鳥会27回(1回平均30名)

[会計]

(1) 平成21年度決算報告

(2) 平成21年度会計監査報告

大野信明、村野紀雄監事から適正に処理されている旨の報告があった。

2. 平成22年度事業計画

[総務]

(1) 野鳥写真展の開催

開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー

開催期間：平成22年4月27日(火)～5月9日(日)

(2) 「北海道野鳥だより」の発送(160号～163号)

(3) 野幌森林公園自然ふれあい交流館写真展

開催期間：平成22年6月1日(火)～6月30日(水)

(4) 新年講演会、野鳥写真映写会の開催

平成23年1月予定

(5) 愛護会名入りカレンダーの作成・販売(80部)

(6) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)

(7) 傷害保険の更新

[広報]

(1) 「北海道野鳥だより」160号～163号の発行

(2) ホームページの維持・運営

[探鳥]

(1) 探鳥会27回(宿泊探鳥会を含む)

[会計]

(1) 平成22年度予算(案)

[その他]

(1) 当会の今後を考え、会員増加対策や会のあり方などをフリートークで議論した。

[役員人事]

監事の大野信明さんと、広報の山下茂さんが退任した。また、監事に蒲澤鉄太郎さんが、探鳥幹事に新たに佐々木裕さんが加わった。

[平成22年度役員]

顧問 谷口 一芳、藤巻 裕蔵、井上 公雄

会長 小堀 煌治

副会長 戸津 高保

監事 蒲澤鉄太郎、村野 紀雄

会計幹事 清水 朋子、横山加奈子

代表幹事 白澤 昌彦

幹事

(総務)◎岩崎 孝博、栗林 宏三(兼)、佐藤ひろみ(兼)、

品川 睦生、竹内 強、中正 憲信(兼)、

畑 正輔、松原 寛直、横山加奈子(兼)

(探鳥)◎中正 憲信、梅木 賢俊、門村 徳男、

栗林 宏三、後藤 義民、佐藤ひろみ、

田中 洋、富川 徹、成澤 里美、

早坂 泰夫、松原 寛直(兼)、鷺田 善幸

(広報)◎樋口 孝城、岩崎 孝博(兼)、北山 政人、

白澤 昌彦(兼)、高橋 良直、武沢 和義、

道場 優、戸津 高保(兼)、道川富美子

(◎印は各担当の代表者)

平成21年度 決 算 書

(収入の部)

項目	予 算	決 算	増 減	備 考
個人会費	520,000	522,000	2,000	
家族会費	99,000	109,000	10,000	前納、後納を含む
団体会費	10,000	20,000	10,000	
事業収入	80,000	64,860	▲15,140	参加費、売上金他
雑 収 入	6,381	17,831	11,450	宿泊探鳥会余剰金他
寄 付 金	10,000	69,900	59,900	探鳥会支援、個人寄付
小 計	725,381	803,591	78,210	
繰 越 金	324,619	324,619	0	
合 計	1,050,000	1,128,210	78,210	

(支出の部)

項目	予 算	決 算	増 減	備 考
印 刷 費	490,000	512,160	22,160	野鳥だより、封筒印刷費
通 信 費	90,000	104,680	14,680	野鳥だより郵送費他
会 議 費	45,000	39,325	▲5,675	幹事会、新年講演会
消耗品費	40,000	34,689	▲5,311	用紙類、野幌写真展備品他
交 通 費	20,000	15,000	▲5,000	野鳥だより発送業務
報 償 費	55,000	55,000	0	事務所費用、講師謝礼
傷害保険費	25,000	18,200	▲6,800	保険料
雑 費	50,000	44,650	▲5,350	写真展他
予 備 費	135,000	0	▲135,000	
基金積立	100,000	100,000	0	
合 計	1,050,000	923,704	▲126,296	

1,128,210 (収入) - 923,704 (支出) = 204,506 (次年度へ繰越)

平成22年度 予 算 書

(収入の部)

項目	本年度予算	前年度予算	増 減	備 考
個人会費	500,000	520,000	▲20,000	
家族会費	100,000	99,000	1,000	前納、後納を含む
団体会費	15,000	10,000	5,000	
事業収入	65,000	80,000	▲15,000	参加費、売上金他
雑 収 入	15,494	6,381	9,113	
寄 付 金	10,000	10,000	0	
小 計	705,494	725,381	▲19,887	
繰 越 金	204,506	324,619	▲120,113	
合 計	910,000	1,050,000	▲140,000	

(支出の部)

項目	本年度予算	前年度予算	増 減	備 考
印 刷 費	480,000	490,000	▲10,000	野鳥だより印刷費
通 信 費	110,000	90,000	20,000	野鳥だより郵送費他
会 議 費	46,000	45,000	1,000	幹事会、新年講演会
消耗品費	52,000	40,000	12,000	事務用品他
交 通 費	16,000	20,000	▲4,000	野鳥だより発送業務
報 償 費	55,000	55,000	0	事務所費用、講師謝礼
傷害保険費	16,000	25,000	▲9,000	保険料
雑 費	50,000	50,000	0	写真展費用他
予 備 費	85,000	135,000	▲50,000	
基金積立	0	100,000	▲100,000	
合 計	910,000	1,050,000	▲140,000	

積立基金特別会計

(21年度収入決算)

項目	金額
繰 越 金	300,000
一般会計より繰入	100,000
合 計	400,000

(22年度収入予算)

項目	金額
繰 越 金	400,000
一般会計より繰入	0
合 計	400,000

会 員 数

	18. 4. 1	19. 4. 1	20. 4. 1	21. 4. 1	22. 4. 1
個人	321	316	286	271	260
家族	34	32	33	36	38
団体	2	2	2	2	3



円山公園
 2010. 3. 7
 札幌市北区 内山 雅子

2008年4月29日から始めた私たち夫婦のバードウォッチングも、もうすぐ満2年です。

探鳥会や野外でお会いする方々のおかげで、色々な鳥に出会うことができています。感謝！この冬は、どこへ行っても鳥に出会えなく、昨年、我が家の近辺（エルムの森公園、札幌北高の周り、北大構内）でよく見かけた、マヒワ、ベニヒワ、レンジャクはこの冬は出会えません。

庭のバードテーブルに来るスズメ、シメ、シジュウカラ、ツグミ、ムクドリ、ヒヨドリをながめる毎日です。

3月7日、午前は雪の予報でしたが、そろそろ春の足音がと思い、円山公園探鳥会に出かけました。しばらくぶりにベテランの皆様にお会いして、この冬はどうだったのかと少し気になりつつ出発。ウソが桜林に10:30ごろ出勤なので、それに合わせて、コースをとりますとの事。入念な下調べに感謝です。

しっかり、十数羽のウソ・アカウソにも出会えました。シジュウカラ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、コゲラにも出会え、雪の中たのしい時間を過ごしました。

これからも自然の中を歩き、大地を感じ、風を感じ、音を感じ、鳥との出会いを楽しんでいきたいと思っています。

【記録された鳥】トビ、マガモ、コゲラ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、ウソ、シメ、スズメ、ハシブトガラス、ドバト

以上14種

【参加者】石神直登・美代子、板田孝弘、今泉秀吉、今村三枝子、内山純一・雅子、奥島憲英、佐々木泰夫、佐々木容子、品川睦生、高橋きよ子、高橋良直、武沢和義、立田節子、田辺 至、対馬洋子、戸津高保、飛岡秀行、中正憲信・弘子、西尾京子、畑 正輔、原 美保、樋口孝城、広木朋子、村上茂夫、山田甚一、吉田慶子、吉中宏太郎・久子

以上31名

【担当幹事】武沢和義、中正憲信

モエレ沼

2010. 4. 11

江別市 浪田 良三

水辺の鳥が見られる場所として、札幌市の中心部から比較的に近いモエレ沼公園は、3年前に新しく探鳥地に企画されました。広々とした公園の周辺で、鳥たちまでの距離がウトナイ湖などに比べると近く、このように恵まれた環境での探鳥会は、毎年楽しみにしております。

今年は雪解けが遅く、公園内には広く残雪が見られました。担当幹事さんの挨拶のなかで、沼の氷は3～4日前に解けたとのことでした。沼に氷が残っていると、そこにオジロワシが降りていることがあり、見られるところですが、今日はどうでしょうかとお話しました。

いよいよ沼を見下ろす遊歩道に着き、ヒドリガモの鳴き声などを聴きながら観察を始めると、周りから「ヨシガモ発見」、「ミコアイサがいる」などの声が上がるので、水辺の鳥たちは、次々と確認することができました。

探鳥会では、多くの観察者の目があるので、空を通過する鳥も、どなたかが感知してくれます。白鳥が1羽、美しい姿で通過し、そしてオジロワシが1羽西方向に通過する姿が見られました。それを敵視したカラス1羽がワシを追っていましたので、カラスには両者の大きさの違いをしっかりと見せてくれた功績がありました。これらが見られるチャンスは、それぞれ数秒程度です。

上空を通過したもので、最も感動を与えてくれたのはカモメの群れでした。よく見ると100羽以上と思われるカモメがそれぞれ輪を描き、それが円柱状に集まって飛翔していました。大きな群れに、やや小さな群れがそれに続き、南東方向に移動して行きました。これは、素晴らしい光景でした。こんな情景に出会えることは、私にとって、めったにありません。幹事さんは、「渡りですね」と説明されていました。

一方、沼周辺の雑木林や公園のトドマツ林などには、オオジュリン、ヒガラ、キクイタダキなど野の鳥、森林の鳥の姿も見られました。しかし、現れた種類が昨年より若干少なかったのは残念でした。

モエレ公園は、沼を含めて1.89km²の広さがあるとのこと。広大な公園地として、今後もこの環境が保たれるのは幸いなことです。

先ほど渡って行ったカモメの集団は、どうなっただろうか、渡りはどんなルートだろうかなどと思いつつ、公園を後にしました。

【記録された鳥】カイツブリ、アオサギ、トビ、オジロワシ、ハイタカ、オオハクチョウ、マガモ、コガモ、ヒドリガモ、ヨシガモ、オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、オオバン、カモメ、シロカモメ、ヒバリ、イワツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、キクイタダキ、ヒガラ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上30種

【参加者】赤沼礼子、荒木良一、石神直登・美代子、板田孝弘、井上公雄、井上詳子、今泉秀吉、今村三枝子、牛込直人、大阪博記、川東保憲・知子、北川博一、北山政人、栗林宏三、後藤義民、小山久一、佐伯武美、坂井伍一・俊子、佐野幸子、品川睦生、高田征男、高橋良直、竹永雅子、辻 雅司・方子、道場 優、内木克巳・靖子、中正憲信・弘子、中村 隆・廣子、浪田良三、蓮井 肇・敏恵、畑 正輔、濱野由美子、早坂泰夫、林 友行、樋口孝城、広木朋子、真壁スズ子、松原寛直・敏子、百々瀬 満、山本和昭、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子、渡会やよひ

以上55名

【担当幹事】北山政人、樋口孝城

宮 島 沼

2010. 4. 18

【記録された鳥】ウsp.、アオサギ、トビ、オジロワシ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、カモメ、キジバト、ヒバリ、ハクセキレイ、モズ、オオジュリン、カワラヒワ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上25種

【参加者】荒木良一、板田孝弘、今村三枝子、岩崎孝博、川東保憲、品川睦生、白澤昌彦・瑠美子、高田征男、高橋良直、田村俊基・あや子、徳田恵美、戸津高保・以知子、長尾保秀・由美子、中正憲信・弘子、浪田良三・典子、畑 正輔、浜野チエ子、原 美保、辺見敦子、松原寛直・敏子、山本和昭、横山加奈子、吉中宏太郎・久子

以上31名

【担当幹事】岩崎孝博、畑 正輔

野 幌 森 林 公 園

2010. 4. 25

札幌市白石区 岡本健太郎

私は、春の息吹を感じたく、野幌森林公園の探鳥会に一人で参加させて頂きました。まだ、外は肌寒く、凜とした空気がとても春らしく、心地よく感じられました。

大沢口に集合し、林道を歩き始めると、すぐにフクジュソウ、フキノトウ、ザゼンソウが道端で顔を出しており、我々を温かく歓迎してくれました。

観察の途中、林道脇の木々にとまっていたカラ類に向かって、会員の方が手を差し伸べると、餌をくれると思い、手の上に舞い降りるといふ不思議な光景を目にしました。本来、警戒心を持ち、厳しい自然の中で生き抜いているは

ずの野生動物が、このように人間に飼い慣らされている状態は、決して良くないことだと思いました。

その後、東屋で小休憩した際、会員の松原さんから、この先の林道脇で最近営巣しているクマガラのお話をして頂きました。果たして、我々もその姿を観察できるのだろうかかと期待と不安を胸に、現場へ到着しました。しかし、巣穴は林道の裏側に位置し、非常に観察しづらく、ずっと巣穴に入り込んで出てこない状況でした。5分経過し、全員が諦めておりましたが、幸運にも巣穴付近でクマガラのつがいを確認することができ、その赤いベレー帽の勇姿に深く感動しました。いつの日か、あのつがいの雛が、この営巣木から力強く羽ばたく日がくることを強く願っております。

今回は、このような貴重な場所に御案内して下さった幹事さん、会員の皆さん、本当にありがとうございました。また、機会がありましたら、是非参加させて頂きたいと思っておりますので、今後とも宜しくお願ひ申し上げます。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、コゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、ヤマゲラ、クマガラ、ヒヨドリ、ヒレンジャク、ヤブサメ、ウグイス、エナガ、キクイタダキ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、アオジ、ゴジュウカラ、カワラヒワ、ウソ、ハシブトガラス 以上21種

【参加者】赤沼礼子、今村三枝子、板田孝弘、内山純一・雅子、岡本健太郎、川村真樹子、北川博一、栗林宏三、後藤義民、小西美美枝、坂井伍一・俊子、品川睦生、清水朋子、鈴木正江、竹永雅子、高橋きよ子、立田節子、中正憲信・弘子、中村章彦、西尾京子、野口昭男、蓮井肇・敏恵、畑 正輔、早坂泰夫、平野規子、広木朋子、真壁スズ子、松尾泰博、松原寛直、山本秋彦、横山加奈子 以上35名

【担当幹事】後藤義民、横山加奈子

藤 の 沢

2010. 5. 5

【記録された鳥】トビ、マガモ、キジバト、ヤマセミ、アカゲラ、コゲラ、クマガラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ルリビタキ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、エナガ、ハシブトガラ、コガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、ウソ、シメ、スズメ、コムドリ、カケス、ハシブトガラス 以上33種

【参加者】秋本秀人、石垣啓一、板田孝弘、岩崎孝博、大橋さやか、北川博一、栗林宏三、栗原隆治、小西峰夫・美美枝、小林量平、小堀煌治、小松正幸、志田憲治、品川睦生、田辺 至、道場 優、戸津高保・以知子、中村 隆・廣子、早坂泰夫、樋口孝城、松原寛直・敏子、矢嶋一昭、横山加奈子 以上27名

【担当幹事】栗林宏三、小堀煌治

野 幌 森 林 公 園

2010. 5. 9

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、オオタカ、マガモ、

カルガモ、キジバト、アオバト、カワセミ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ヒレンジャク、コリリ、クロツグミ、マミチャジナイ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、ニューナイスズメ、ハシブトガラス 以上35種

【参加者】赤沼礼子、井上公雄、今村浩史、今村三枝子、大賀 浩、栗林宏三、河野美智子、後藤義民、小西峰夫・美美枝、斉藤由美子、佐藤昭宣、品川睦生、清水慶一、高橋利道、竹田芳範、辻 雅司・方子、内木克巳・靖子、中正憲信、中村章彦、中村 隆、野坂英三、蓮井 肇・敏恵、畑 正輔、広木朋子、辺見敦子、牧田暁夫、松原寛直・敏子、山本昌子、横山加奈子、横山美和、吉田慶子 以上36名

【担当幹事】後藤義民、松原寛直

◆2010.3.21のウトナイ湖は次号に掲載します。



【旭岳】

2010年7月3日(土)～4日(日)の宿泊探鳥会です。案内は前号(第159号)をご覧ください。事前申し込み制で、定員は既に満たされています。

【野幌森林公園】 2010年7月11日(日)、9月5日(日)

野幌森林公園も繁殖期後半から終盤の7月と、夏鳥たちが南へ帰り始める9月とでは、それぞれに異なる趣があります。7月にはまだ親にまわりついている巣立ちヒナがみられるかもしれません。9月には再び野幌の主役となるキツツキ類やカラ類を楽しみます。大沢園地で昼食をとり、大沢口に戻るのは午後1時頃になります。

集 合：野幌森林公園大沢口 午前9時

交 通：JR新札幌駅発、夕鉄バス「大沢公園入口」下車、JRバス「文京台南町」下車 徒歩各6分

【石狩川河口】 2010年8月15日(日)、9月19日(日)

秋の渡りシーズンの前半と後半に石狩浜・河口で主にシギ・チドリ類を楽しみます。また、カモメ類やアジサシも見られます。はまなすの丘公園ビジターセンターの前から浜に出て砂浜を河口まで、河口からは石狩川に沿って戻ります。夏、秋のはまなすの丘公園の植物も楽しめます。全部で4km弱の行程になります。正午近くに駐車場に戻ってから鳥合わせをし、センター内などで自由に昼食をとることになります。探鳥会終了後に石狩市北生振にある「いしかり調整池」(第156号参照)に回ってみるのもお勧めです。

集 合：ビジターセンター駐車場 午前9時30分

交 通：札幌駅発中央バス7番石狩行 終点「石狩」下車、徒歩20分

【鶴川河口】 2010年8月29日(日)

鶴川河口付近の自然干潟や人工干潟でのシギ・チドリ類の観察が主目的です。当日の天候次第ですが、人工干潟付近で鳥合わせをし、自由解散となります。「四季の館」に戻って館内ロビーで昼食をとられる方々が大半です。館内には食堂や売店もあります。

集合：鶴川温泉「四季の館」駐車場 午前9時30分
交通：札幌駅または地下鉄大谷地駅発、道南バス浦河行(ペガサス号)「四季の館」前下車

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り行います。
☆昼食、雨具、筆記用具をお持ち下さい。
☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465
午前10時～午後4時(土・日祭日を除く)

鳥民だより

◆会員増にご協力を!!◆

総会報告の会員数をご覧いただけるとわかりますが、近年会員数は減少し続けています。運営費の大部分は会費収入によるものですが、平成21年度決算においては、繰越金の減少のため将来の事業に備えての積み立て基金特別会計への繰入れができませんでした。このままでは将来的な会の運営に支障をきたすことが明らかです。

幹事会における試算では、会員減少がここ数年と同じような傾向で今後も続くとしたならば、数年のうちに収入不足のために会の運営は困難になることが予測されています。年会費値上げという方策もありますが、可能な限りそれは避け、まずは会員増によって収入の確保を目指したいと考えています。会員の皆様一人ひとりが会員増にご協力してくださいようお願い致します。

◆平成22年度野鳥写真展出展者・作品◆

- 荒木 良一 コルリ、ツツドリ
- 漆崎 修 ゴジュウカラ、ダイサギ
- 大橋 晃 ケアシノスリ
- 北川 博一 キクイタダキ
- 小堀 煌治 コウノトリ、ダイゼン
- 坂井 伍一 ケアシノスリ、トラフズク
- 品川 睦生 イスカ、シメ
- 高橋 良直 ハマシギ、マガン
- 田中 陽 オオタカ、タゲリ
- 中正 憲佑 オオタカ、ケアシノスリ
- 蓮井 肇 ヤブサメ
- 山田 甚一 コゲラ、メジロ

- 山田 良造 アカゲラ、ノゴマ
- 吉中宏太郎 コクガン

以上 14名 24点

◆写真集「鷲たちとボクの30年」出版◆

この号にハシブトアジサシの記録を寄せてくれた泊和幸さんが30年間撮りためた写真集を7月半ばに出版します。農業のかたわら、寒風ふきすさぶ日本海での撮影。根気と執念の作品集です。日本海に漂着したクジラやアザラシの死体に群がるオジロワシやオオワシが利尻富士をバックに野生のドラマを展開しています。オジロワシの背中に乗るハシブトガラス、アオサギを追いかけるオジロワシなど迫力満点です。

オジロワシの営巣写真も掲載されていますが、泊さんは巣を見つけて一年間我慢しました。親や巣の様子を観察し、2年目に巣から100m離れた場所にブラインドを設置し、雛が3羽無事巣立ったということです。泊さんが撮影時に心がけているのは、「はやる心を抑えてじっと我慢、動物に殺気を感じさせないこと」だそうです。

北海道新聞社出版局製作協力で、価格は2,600円。紀伊国屋書店などで発売予定です。(紹介 小堀煌治)



鷲たちと
ボクの30年

泊 和幸

【新しく会員になられた方々】

- 北川 博一 (札幌市東区)
- 温井日出夫 (札幌市西区)
- 漆崎 修 (札幌市手稲区)
- 清水 慶一 (夕張郡栗山町)
- 泊 和幸 (天塩郡遠別町)
- 生越 武子 (神奈川県茅ヶ崎市)
- 大阪 徳美・真由美 (旭川市)
- 佐藤 國男 (札幌市手稲区)
- 松木 修・ゆう子 (札幌市中央区)

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>